

Title	コンバウン王朝時代(その二)
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 37 p.19-p.31
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80592
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コンバウン王朝時代（その二）

服 部 正 一

“The Period of Konbaung Dynasty” II

Masaichi HATTORI

န မေ ဘ တ ယ ဘ ဂ ဝ တေ ဘ အ ရ ဟ တေ ဘ သ မှ ဘ သ မျှ ခွ ယ

၍ ဆေ ဘ င်း ပါး ခွဲ တင် ပြု လို သည် အချက် အလက် များ မှာ ၊ ယေဘုယျ အား ဖြင့် ဆင်ဖြူရှင် နှင့် ဘိုး တော် ဘုရား ၊ ၎င်း အကျိုး အကြောင်း များ ဖြစ် ပါ သည်။ အလောင်း မင်း တရား မိန့် တော် မူ ခဲ့ သော စကား များ သည် ကား မြန် မာ လူ မျိုး တမျိုး လုံး ကို တက် တက် ကြွ ကြွ ဖြစ် စေ ချ် ကမ္ဘာ ပေ T ရှိ မည် သည် လူ မျိုး ကို မဆို ကြေ ဘက် ရွံ ခြင်း မရှိ ဟူ၍ မြန် မာ တို့ ၎င်း စိတ် ခါတ် ကို ကြံ ခိုင် စေ ခဲ့ ပါ သည်။

အဘယ် ကြောင့် ဆို သော် ၊ ဆင်ဖြူရှင် မင်း လက်ထက် ကလတ် တလေ ဘ ဖြစ် လာ သည် အရေး တော် ပုံကြီး ကား အခြား မဟုတ် ၊ တရုတ် ဗမာ စစ် ပွဲကြီး ပင် ဖြစ် သည်။ ယင်း စစ် ပွဲကြီး ဖြစ် သည် နှင့် တပြိုင် နက် တည်း ၊ သို့ မဟုတ် ဆက်တိုက်၍ ကြိုက် ခဲ့ ရ သော အရေး တော် ပုံကြီး များ ကား ယိုး ဒယား နှင့် စစ်တိုက် ရခြင်း ၊ မဏိပူရ သို့ ဝင် ရောက် တိုက် ခိုက် ရခြင်း ၊ မွန် တလိုင်း တို့ ၎င်း ပုန် ကန် တော် လှန် ခြင်း ၊ ရခိုင် ကို အောင် မြင် ပြီး သည် နောက် ၎င်း ပြည်တွင် လူဝတ် ရှား ထွေ မှု ဖြစ် ပေ T လာ ခြင်း စသော အရေး တော် ပုံ အရေး အခင်း များ ဖြစ် ပါ သည်။

ထို့ နောက် မြန် မာ တို့ သည် တရုတ် စစ် ပွဲကြီး ကို အောင် မြင် သည် ဟု စိတ် မာန် တိုး တက် ခြင်း ၊ ထို့ အပြင် ဘိုး တော် ဘုရား ၎င်း စစ် မက် လို လား သော စိတ် သဘော ရှိ ခြင်း သည် ပင် လျှင် မြန် မာ မင်း ဆက် များ ပျက် စီး ခြင်း သို့ ရောက် ရသည့် အကြောင်း တရား တခု ဖြစ် ပါ လိ မ့် မည်။

ဘိုး တော် ဘုရား ၎င်း လူ့ အကျင့် စာ ဂိုဏ်း နှင့် ပတ်သက်၍ ရာဇဝင် သမိုင်း လိုက် စား သူ များ ၎င်း ထင်မြင် ချက် များ မှာ ကွာခြား လျက် ရှိ သော် လည်း ။ လူတ

ဦး အနေနှင့်ချီယုင်း ချက်များ အနည်း နှင့်အများ ရှိစေကာမူ ဘိုး တော်
တူရား သည်သူများ ဤ ဆွဲရတသမှု မဟုတ်ဘဲ စိတ်ဖြူခိုင်ခံ့သည်ဟုသတ်မှတ်ထိုက်သော
ပုဂ္ဂိုလ်တဦး ဖြစ်သည်ကို ဝန်ခံရပေမည်။

ဘိုး တော်တူရား လက်ထက်တွင်အမျိုးမျိုး သေခံခဲ့ရမည်ဖြစ်ပြီး ပုဂ္ဂိုလ်များ ပေါ်
ထွန်း ခဲ့ရသဖြင့် မြန်မာ့ယဉ်ကျေးမှုသမိုင်း နယ်ပယ်တွင်မြင်ကွင်း ကျယ်ခမ်း နား
မူကိုဖြစ်ထွန်း စေခဲ့ပါသည်။ ဘိုး တော်တူရား ၏ ဆောင်ရွက်ချက်များ နှင့်
ပတ်သက်၍ အကျိုး အကြောင်း တူသလို ကောင်း မှုများ ကို နောက်ဆောင်း
ပါး၌ ဖော်ပြရေး သား လိုပါသည်။

まえがき

本論文では、主としてシンビューシンとボードーパヤーを中心に当時のビルマ人がたどった跡を概観す。先王アラウンパヤーの言葉によって吹鼓されたビルマ人の民族的自覚は彼らをしてビルマ国がかって経験した最大の危機の一つ、即ち、対中国戦を勝ち抜くまで戦わしめた。尚その他、マニプールへの侵略、タイ遠征、モン族の蜂起、アラカン征服に続くアラカン動乱等が同時に、或いは、相続いて行われ、その結果、ビルマ軍の自信過剰となり、その上、ボードーパヤーの好戦的意図はビルマ王朝滅亡を早める一要因ともなった。

ボードーパヤーの性格については史家によって多少の見解の相違はあるかも知れないが、人間的に缺点の多い反面、人の言いなりになるようなことのない、しんの通った人物であったことも認めねばならない。また、彼の時代には文化面においても多彩な人物が現出し、ビルマ文化史上一大盛観を呈する。ボードーパヤー王の業績については次の号にて述べることにする。

初期コンバウン王朝下のビルマ。

アラウン・パヤーは最後のビルマ王朝、即ちコンバウン王朝を建設した。それはその王朝の最後の王 ^{ティーボー}Thibow 王が1885年英軍によって廃位されるまで王位を保った。彼らの偉大な指揮者の目ざましい業績によって新しい力がビルマ国民の中に侵透し、ビルマ史上比肩し得ない成功を納めた彼の子孫である ^{シンビューシン}Hsinbyushin 及び ^{ボードーパヤー}Bodawpaya たちによって開発された。彼らは隣国種族の恐怖となった。彼らはチェンマイを降伏させ、アユタヤーを焼盡し、中国を逆転させ、アラカン^ンを征服し、マニプール、Kachar、Jaintia 等を略奪し、遂にはアッサムの支配権を獲得した。領土拡張と征服は1824年までビルマ政策の基本方針であった。しかし、それは無法な政策であり、国の財源に注意を払わなかった。そしてその理由のためにのみ、例えそれがパダドー王をしてベンガルにおけるイギリスの地位をおびやかす、また、1824～26年に到る第一次英緬戦争を早めるに到らなかったとしても結局失敗したにちがいがなかったであろう。

^{ナウン ドーデー}
Naungdawgyi: (1760～63)

アラウンパヤー王の長男ナウンドーデーについてはビルマ人の史家も称讃する言葉は少なく、

外国との交渉も拙なく、国民の評判もよくなく、それ故、モン族及び旧タウングー王家に属する者たちに反乱の機会を与える結果となり、イギリスとの協定においても先にアラウンパヤー王がイギリスと結んだ条約について知らなかったようである。

ナウンドーザーは即位するや、父王アラウンパヤーの配下にあった部将の数名を嫌疑の廉で処刑し、アラウンパヤーにとっては最も信頼すべき部下であった ^{ミン カウン ノー ヤター}Min-hkaung Naw-yahta さえをも叛逆の廉で殺害した。その理由は、Hall(P.87)によれば、Min-hkaung Naw-yahtaはインワを奪取し、旧タウングー王朝を復活せんことを計画したという疑いであった。これ程に嫌疑の眼は常にビルマ王宮の雰囲気の中に漂っていたことは王家に属する人々にとっては悲劇と言うほかはなかった。このことに関連して学報32号34頁においても述べた通りである。

一方、モン軍の部将であったタラバン（学報34号、51～2頁）はその後タトン地方のコーグン洞窟に身をひそめていたが、彼の一族が捕えられるに及んで、彼は王の面前に自首し、彼の一命に代えて一族の者の助命を請うた。王はタラバンの武士道的精神に感じ、彼らを釈放し、タラバンを王の配下に入れた。

東インド会社は ^{アルヴズ}Alves 船長を派遣して、先にネグレイズ島におけるイギリス人、インド人を含めて約100名の殺害事件に対する賠償、及び加害者の処罰をビルマに要求せしめた。しかし、イギリスはその頃インドに一帝国を獲得せんとするのに手一杯であったので、その要求を強行するだけの余ゆうはなかった。ビルマ王はその要求を拒絶はしたが、王も兵器弾薬の緊急な必要に迫まれていたので、東インド会社とは貿易の再開を切望していた。しかし、アルヴズ船長は貿易に関する協定には権限を与えられていなかった。彼が受けていた指令はビルマと東インド会社との関係の結末をつけることであった。それはイギリス人捕虜がなおビルマ軍の手中にあったので彼らの釈放を確約するためにアルヴズは彼らの中の二名を残してバセインにある東インド会社の所有物を見張らせることを約束せねばならなかった。そして撤退問題は懸案とした。東インド会社はビルマとの貿易には利益がないこと、また当分の間、ビルマにおけるフランス勢力の復活の恐れのないことを見きわめた。

その後、イギリスとの貿易協定については結局彼らがネグレイズ島に立寄らないことを条件として貿易再開を認め、東インド会社はそれ以後、バセインとラングーンにて貿易を行うこととなり、イギリス人捕虜を釈放した。そして、3年間在位の後、ナウンドーザー王は他界した。

^{シンビューシン}
Hsinbyūshin 王 (1763～1776)

アラウンパヤーの没後、その長男 ^{ナウン ドー ザー}Naung-daw-gyi^{マウン ラウ}が3年間統治した後、弟シンビューシン〔「白象王」の意、本名は ^{マウン ラウ}Maung Lauk〕が継承したが、1765年首都はシュエボからインワへ遷された。従ってインワは第三度目の首都となったのである。インワへの遷都はそれまでのところ賢明なる一歩であった。何故ならばミング河沿いにチャウセの穀倉地帯と直接交通の便があり、シュエボが内陸都市であるのに反してインワはイラワダー河に臨んでいるからである。しかし、この一歩

は十分な進歩とまでは行かなかった。学報32号26頁にてもふれたが、当時、ビルマの主なる中心はデルタ地帯に移りつつあったからである。それは、ハーヴィも指摘する如く (P. 137), バインナウン (1551~8) からアナウベッルン (1605~28) までの歴代諸王がペゲーをその本拠として行動したことがあたかもこの事実を認識していたかのように思われる。しかし彼らの後継者の中には一人としてこの事実を認識することができなかったということがビルマ王国の運命を決したのであろう。若しラングーンがビルマ宮廷の所在地であったならば、そこに新鮮な空気が海外から流れ込んだかも知れなかった。デルタ地帯はビルマ族にとっては外国も同然であり、モン族の間にあって不安を感じたことであらう。彼らがデルタ地方に遷都することを欲しなかったために彼らの宮廷の雰囲気は上ビルマの村落のそれと何ら異るところはなかった。言い換えれば、19世紀における彼らの思想は9世紀における彼らの思想そのままであった。

タイ遠征 (6度目のアユタヤー包囲)

アラウンパヤー王の時代に征服できなかったタイ国を今やシンビューシンはそれを征服した。シンビューシンがタイ国を攻撃した主な理由は、1760年アラウンパヤー王がタイ国を攻めた時のビルマ軍の敗北に対して報復せんとする意図であった、と考えられる。それに加えてアユタヤーの宮殿に蓄積された莫大な財宝もビルマ王の欲望を刺戟するに十分であつただろう。

ビルマ軍の主力は1764~7年の間をタイ遠征に費した。遠征はビルマ軍の二人の部将^{ティハパテ}Thihapate^{マハー・ノーヤター}とMaha Nawyahtāの指揮によって開始された。ティハパテは大部分シャン族を含む2万の軍を引きいてセントウン (又は、チャインドウン) より出発し、一方マハー・ノーヤターも同じ位の兵力を引きいてタボイよりペチャブリーへ東南に進んだ。ティハパテはチェンマイ、リンズイン及びタイ国内の諸州を屈服させ、メナム河に沿ってタイ国軍を撃退しつつ主都アユタヤーの東に陣取った。そうこうするうちに、マハー・ノーヤターはメルギー北方の山々を横ぎって海岸沿いにアユタヤーに迫った。それに対してタイ国軍は彼らの連絡を断とうとして軍を送ったが敗北を喫し、二人のビルマ軍の部将はアユタヤーの城壁の下にて手を結んだ。

ビルマ軍は辛苦と戦いつつ1, 2年 (ウ・ティンウでは14ヶ月) 間も都を包囲し、その間町村を建設し、田畑を耕やし、雨にも耐えた。最後の戦闘では、都の城壁の基礎に達するためほら穴を掘り、また城壁の基礎一面にもほら穴を掘って、薪を積重ねて、火をつけ、城壁がくずれ落ちるや、城内に突入した。その間にマハー・ノーヤターは病死したので、ティハパテがビルマ全軍の指揮をとった。タイ国王は傷ついて倒れた。このようにして遂に都は陥し入れられた。それはちょうどアラウン・パヤー王の時代にモン族の都ペゲーを落し入れたと同じように、タイ国人の都アユタヤーは亡びた。

1563年バインナウン時代にタイ国を征服した如く、今やシンビューシンは勝利の中にあつて、多くの財宝、技術者、学者、芸術家、タイ王家に属する人々を連れ去った。これはビルマの第二回目のタイ遠征であった。しかし、「バインナウン王のタイ遠征は王者にふさわしい戦いであつた

タイ国軍は Paya Tak 指揮の下にアユタヤーより血路を開き、一時カンボジア領内に避難したが、数ヶ月して Paya Tak は大軍の先頭に立ち、ビルマ守備軍を掃蕩してタイ軍の勢力を挽回した。そして1768年の末までにアユタヤーを取戻したが、新首都を海辺近くのバンコックに建設した。このようにタイ国が急速にその敗北より回復しつつあった時に、シンビューシンは彼らを攻撃する力がなかった。というのは中国との国境紛争が急を告げようとしていたために国の守りが必要であったからである。

タイ遠征が行われる直前のことであるが、1763年頃にマニプルはイギリス軍の援助を頼りビルマ侵略を準備していた。しかし、東インド会社からの助けを得ることに失敗して、マニプル王は翌年1764年に単独にてビルマに軍を進めた。シンビューシン王は遠征隊を引きいてマニプル兵を撃退し、逆にマニプルに攻め入った。そしてマニプル王をはじめ多数の者を捕虜としてインワに連行した。

1765年、中国では清高宗乾隆（Chien-lung）の時代であるが、ウ・ポチャ（P. 210）によれば、アラウン・パヤー王の時代に、ビルマ軍によって追撃された Gwe Shan 族の長 Guñña-ein（学報 34号、46頁）は中国国境へ逃げ、シャン土侯たちと仲違いし、騒然たる様相を呈したが、それを中国側はビルマ軍のうまくたくらんだ策略であると解した。また、シンビューシンが中国隷下にあるシャン土侯に朝貢を要請したが、中国側はビルマこそ中国に服従すべきであると言ってきた。このように陰悪になってきた折も折、次のような事態が発生した。

၄၆: ဆဉ် (恐らく雲南) 政府に訴えた。この事件があつて間もなくチャインドウン (または、ケントウン) にて交易上のことで中国の商人 Lotāyè という者外数人の中国人と数人のビルマ人との間で争いがあり、一人の中国人が殺害された。ビルマ側の代表はビルマ国内で起つたことなのであるから、ビルマの法律に従つて、殺人償金を支払い、なお加害者を処罰することを約束し

たが、犯人を相手国に引渡すことを拒んだ。しかし、中国人たちは殺人者を中国側に引渡すように主張し、それが聞き入れなかったので、中国政府にその事を報告した。

このようにバーモとチャインドゥンにおける二つの小事件があったが、ビルマには事態を平和のうちに解決する使節はなかった。これらの事情が中・緬戦役の直接原因となったと考えられるが、なおその背景には、ビルマ史家たちも指摘する如く、当時の中国は侵略的な皇帝の治下であり、領土拡張のため中央アジア地域にその勢力を伸ばそうとする欲望が察せられる。また、シャン州に関する問題があった。シャン土侯たちは、ビルマ王が優れている時にはビルマ側に味方するが、中国の勢力が盛んになってくれば中国側に味方するという日和見主義的な傾向があった。従って、両国へ朝貢せねばならない場合もある。シャン土侯にとっては中国対ビルマが戦争すれば勝つ方へ味方するのが身の安全であると考えるのは当然であろう。ビルマはタイ・緬戦役を行っており、戦闘が長引けば当然軍資金の調達にはシャン土侯に要請されるであろう。そうすれば、中国とビルマが争ってくれる方が彼らには好都合だと考えたであろう。そして、中国側に味方するシャン土侯とビルマ側に味方するシャン土侯との間には互いに軋れきを起すこともあった。ともあれ、たとえ上述の二つの小事件が起らなかったにしろ、いずれはこの戦役は避け得ないものであったと推察される。

この戦闘は1765年より1769年12月まで四回に渡って行われるのである。従って、一方ではタイ・緬戦役を続けつつ、中国軍の侵入に対抗しなければならない破目となったが、ビルマ軍は両戦役を勝ちぬくまで戦った。それには、ホールも指摘する (P.90) 如く、先王アラウンパヤーがビルマ軍の将兵たちに、ビルマ族は地球上の如何なる民族をも恐れたことがなかったという絶对的な民族的誇りを植え付けていたことがビルマ軍にとって強固な精神的支えとなっていたからであろう。

中国軍は最初北部ビルマに入り、バーモを奇襲し、続いてカウントンに駐屯せるビルマ国境守備隊を攻撃したが、インワよりの援軍が到着するまでよく持ち耐え、逆に中国軍をバーモの向うへ追いやった。一方、他のビルマ軍はミチナの南ワインモーに進みナムミンクリークの中国軍を破って、中国領土に入った。中国軍はバーモとラシオを基地として大軍をもってシュウエリとミンゲの溪谷を通してビルマに侵入した。ケントゥンの土侯は余儀なく中国軍に加わらざるを得なかった。

ビルマ軍は ^{レッ ウエウイン ムー} Let wè win hmū: 指揮の下に敵軍をメコン河の向う岸に追い払ったが、ビルマの守備隊はケントゥン及びバーモ近くのカウントンに取り残された。

^{マハー シトウ} Mahā Sithu はモーガウンに軍を進めたが、その太守は中国軍に加担したので、太守を処罰し中国軍を支離滅裂に粉碎した。一方センウイを通してビルマに侵入した中国軍の縦隊は折しもタイ遠征より引上げてきた援軍によって増強された ^{マハー テイハトゥラ} Mahā Thihathura の引いるビルマ軍によってひどく撃破された。中国軍はやがて甚大な損害を蒙ってビルマより放逐された。中国軍の捕虜はインワに連行され、特別の宿舎を与えられて、ビルマの婦人と結婚することを許された。

1767年、三度中国軍の主力はビルマに攻め入らんとし、センウィの土侯を屈服させ、ビルマ軍に対する作戦基地としてそこに防砦を築いた。そして、ラシオ、スーポーを経てインワに近づこうとしてナムトゥー河を下った。

一方、乾隆帝は雲南の太守 Ming Jui にビルマを屈服させるためにはあらゆる必要な手段を講じるようにという自由裁量を任せた。雲南の太守 Ming Jui の軍は南のルートより進み、ビルマ軍を破ってインワより30マイルの地点シンカウンまで達した（1768年2月）。事態が切迫してきた時、シンビューシンは彼の首都を撤退せんと準備を整えた。

しかし乍ら、ビルマ軍将兵たちは先王アラウンパヤーが残した言葉を信じ、彼らは侵入軍を迎撃すべく三縦隊に分れて進んだ。マハー・シトゥ指揮下の第一縦隊ははるかに多勢の中国軍によって破られたが、マハー・ティハトゥラ指揮下の第二分遣隊はセンウィの都に突入し、その防砦を封鎖した。ビルマ軍のもう一つの分遣隊はラシオの中国軍防砦を占領し、彼らの連絡線を切断した。そしてセンウィに守備隊を残して、マハー・ティハトゥラはマハー・シトゥに合流してロンカピンデにて中国軍を撃ち破った。中国軍は1767年の終りまでにはビルマの連合軍によってサルウィン河の向う岸へ追撃された。窮迫した Ming Jui は後退しはじめた時には、彼の軍はすでに包囲され、多大の損害を蒙っていた。少数の兵は血路を開いて難を避けたが、太守は彼の主力を救出することができず、中国皇帝に彼の辨髪を送り、自殺し果てた。

第四度目、即ち最後の中国軍の侵入は1769年に行われ、遠征隊はタピン溪谷及びバーモルートを経て先導された。中国軍の分遣隊はモーガウンに送られ、一方主力部隊はカウントンの東12哩にあるシュエニヤウンビンに大防砦を築いて陣取った。しかし、それも ^{バラ ミンドン} Bala-mindon の引いるビルマ軍の強襲を受け、多大の損害を蒙った。また、マハー・ティハトゥラが引きいるビルマ軍はモーガウンを襲った中国分遣隊を打破し、カウントン近くの島に防砦を築いて陣を布いた。そこから彼は中国軍の連絡を断ち切ってカウントンを攻撃せんとする中国軍を反撃するために分遣隊を送った。その作戦は成功し、中国軍の半ばはタピン溪谷を後にし、他の残り半分はシュエニヤウンビンの防砦の中に避難を余儀なくされたが、やがてそこもビルマ軍によって占領された。遂に中国軍は和を求めて、戦闘は終結した。

この戦闘において、ビルマ軍が中国軍に勝つことができた理由としてあげられることは、

- (1) ビルマ国民の精神的支えとなった前述のアラウンパヤーの言葉。
- (2) ビルマ軍部将たちの勇断と互いの団結力が強固であったこと。
- (3) ビルマ軍はポルトガル人より兵員及び兵器を得ることができたこと。
- (4) ビルマ側は陸上戦にては戦象、また水上戦にては軍船を用いたこと。
- (5) その戦闘がビルマ国内において行われたため、よく連絡がとれ、戦象術に巧みであったこと。
- (6) 時期がビルマ軍にとっては最も旺盛な兵力に達していたこと。

それに対して中国軍敗北の理由としてあげられることは、

- (1) 作戦の拙劣であったこと

- (2) 指揮官の間に団結力が不足していたこと。
- (3) ビルマの地勢について知識が不足であったこと。
- (4) ジングル戦や山岳戦に適当な兵器をもって行かなかったこと。
- (5) 兵員が多過ぎたため糧食が充分でなかったこと。
- (6) 兵士が行軍に疲れてしまったこと。
- (7) 気候に不慣れのため赤痢、マラリア等の病気に悩まされたこと。
- (8) 中国軍の精神がくずれたこと。

等であるが、その他種々な要因もあろう。

中・緬戦役の結果

勝利の見込みのないことを知った中国側は2万の兵士と莫大な武器・弾薬を失って、遂に講和を求めた。そこで1769年12月にビルマ・中国間に協定が成立した。センウィ、バーモ、モーガウン、ケントウン等の諸州の土侯は捕虜になっていた中国軍の将校と引替えにビルマ側へ引渡された。バーモ以北の9つのシャン族の町はビルマの所有に帰した。全中国軍を壊滅せんと欲するビルマ王の願望にも拘らず、ビルマ軍総司令官マハー・ティハトゥラは両国間戦役前の関係を回復し、中国軍将兵を無事帰国することを許した。

ビルマ・中国両軍の部将はカウントンにおいて会見し、次の内容の協定文書を作成した。

- (1)中国軍は撤退を許されること。
- (2)両国間の捕虜を交換すること。
- (3)通商が復活されること。
- (4)相互の誤解を避けるため両国間に十年毎に使節を交換すること。

この協定は王の認可を得ずに行われた。

対中国戦においてマハー・ティハトゥルをはじめ、レッウェ・ウインムー、マハー・シトゥ、バラミンディン、サンラジー等の名があげられる。僅かのビルマ兵を引いて数倍もの中国軍と戦った鬼部将として中国軍将兵は彼らをほめたたえた。彼らの体格は鉄のような堅固さであると言って中国人は驚いたという。(ウボチャ、P. 214)。

ビルマ軍将兵たちは王の怒りにふれるのを恐れて帰国しようとせず、1770年1月マニプールへ入った。当時マニプールは善良なる王の治下に最近蒙った破壊より回復しつつあった。ビルマの将兵たちはそこにビルマ王を慰めるための奴隷と家畜が新たな収穫であることを嗅ぎつけた。彼らはこの小国を襲い、森林に逃げおくれた住民をさらって帰国した。王はすでに怒りを鎮めていた。結局彼らは勝利を得、王位を保った者たちであったから、王は彼らには慈悲深かった。けれどもただマハー・ティラトゥラ以下の部将たちを1ヶ月間ミンゲの東方チェッイエツの地に追放し彼らの妻たちは衆人の前にて見せしめのため中国より贈られた絹布を頭上に冠せられて3日間炎

天下に曝された。しかしマハー・ティラトゥラの賢明なる中国との和平協定の結果はそれ以後ビルマ・中国間に長い平和を保たしめた。

やがて牛馬を引きいる隊商の群が雲南から南下してビルマに来るようになった。当時、清国はビルマ綿を相当量買っていたので、その利得は大きかった。しかし、ハーヴィも指摘する如く(P. 142)、物質的利益は精神的それに比すれば無に等しかった。

中国戦役の終結によってシンビューシン王は再びタイ国に目を転じた。1770年より1776年に至る間、戦闘は無残に行われた。タイ国軍の将 Paya Tak はその非常事態に対処した。彼はラオス諸州を占領し、チェンマイよりビルマ軍を駆逐してタイ国の連合を完成した。ビルマ軍は幾度も侵入を繰返し、タイ北辺を蹂躪したが、ビルマ軍はそれを占有することができなかった。1773年召集されたモン族の徴兵は暴動を起し、マルタバンを占領し、ビルマ軍をラングーンに追撃し、そこを焼打ちした。しかしビルマの援軍が彼らを追い払って、またも数千のビルマ兵がタイ国になだれ込んだ。*Three Pagodas ルートに沿って敗残兵を追撃していたビルマ軍はタイ軍によって取囲まれて逮捕された。

*Three Pagodas Route (又は Pass), 即ち「三塔峠」はモールメイン地方である。

かくして、シンビューシン王治世の末年は1773年のモン族との紛争、75年のタイ国の反撃等で暗うつなものであった。それに加えて、ビルマ軍の部将間における内訌は今や戦場においてビルマ軍の災いとなっていた。例えば、対中国戦の勇者マハー・ティハトゥラとタイ攻略の勇将ティハパテは数度に渡って勝利を博したとは言え、募りゆく反抗的勢力に対しては何ら永続的な成果を収めることはできなかった。殊に Paya Tak の反撃の前にはチェンマイにてビルマ軍は不安を感じた。折しも王は翌1776年に没した。

シンビューシン王時代における文化的事業

王が^{ベナーレス}Benares から迎えた9名のバラモンたちはしばしば忠告によって王を助け、また、^{マウン}Maung-daung 長老は彼らの援助によって天文学(占星)、医学、文法等に関するサンスクリット語にて書かれた種々の書物、即ち*Vyākaraṇa をビルマに翻訳した。

*Vyākaraṇa は本来「文法学」を意味するが、インドにおいては古来文法の学は諸科学の基礎学を成すものとして、その学習は最も重要視されたものであり、事実バラモン諸学派はこの古典学から出発してそれぞれ独特の科学を発達せしめたものであるところから、Vyākaraṇa の名は終に百科の学術の総称として用いられるに至った(五十嵐智昭氏訳、「ビルマ史」176頁[註二])

ဗျာကရဏ = ပုဒ်ရဝအစအရင်ကိုပြသောသဒ္ဒါဗျာကရ်ဏ်း ကျမ်း ။
(ဦးမေဝင်္ဂဏ္ဍိး စီစဉ်ရေးသားသောပါဠိအဘိဓာန်ချုပ် ။
ဝဓမ္မာနန္ဒာဝဂ္ဂဝဂ္ဂ)

また^{レッウエトングダラ}Letwethondara (前号, 14頁)は王によって^{カタ}Katha 地方の^{メザ}meza 山へ追放されていたが、そこにおいて彼が感じた孤独を嘆いた名篇“^{メザ}Meza ^{タウン}taung-^{チェ}hky. [メザ山麓之賦]を作り、二ヶ月後、王は彼の詩に感動して彼を呼び戻した。

シングー 王
Singu-Min° (1776~82)

長男シングーはシンビューシン王の後を継いで即位した。彼は直ちにタイ国よりビルマ軍を呼び戻し、間断のない戦役を終結させた。称号や掠奪品を目当てとする将兵を除いては、それまで相続いた戦乱のために悲惨な経験をした住民たちは他国へ移住しはじめた。先づ^{ヨー}Yaw族は徴兵を免れるために彼らの故地を去って遠いカター地方のム溪谷に逃れた。ヨー族はビルマ群に所属する一種族であり、Yawという名はその住地であるパコック県のヨー溪谷に由来する(ハーヴィ, P. 184)。

王は多くのパゴダを建立し、祈りに日常の多くの時間を費し、また彼は釣師でもあったという。彼の正妃には詩才があり、王の若い頃の師は詩人^{ソガ}Nga Hpyaw^{ビョー}であって、後Min-ye-yazaの称号を与えられた。シングー王にとっては遠国にての戦場の辛い生活よりは念仏、釣り、闘鶏、サイコロ遊び、酒宴、宮廷内の美女の笑い声の方がはるかに楽しいものであっただろう。従って一般庶民は戦争の休止を喜んだけれども高官や部将たちは王に対する尊敬心を失い、王の所業はやがて宮廷内での陰謀、遂には王の殺害にまで進展して行くのであった。

マハー・ティラトゥラがタイ国より帰国するや、王は彼を追放し、また不気嫌な時や酒に酔っている時には、彼の妃をも含めて宮廷の人々を処断した。また、微行にて宮廷を去って、数週間も巡礼の旅に出で、その帰還は夜の何時であろうとおかまいなしといった放逸ぶりであった。それらの所業はやがて王の威厳を失墜させ、陰謀者たちに機会を与えるに到った。かつて、王がシェエボ地方のイラワジ河の島にあるティハドー・パゴダに詣でた不在中に、謀徒の一行が王の従弟に当たる18歳になるマウン・マウンというサガイン地方パウンガの領主を彼らの傀儡として王に変装させて深夜、宮廷に向った。王宮の親兵たちも彼を王と思いこんでいたので、この一行を王宮に入らしめた。マハー・ティラトゥラは宮廷に馳せ帰り、マウン・マウンに味方して親兵を指揮した。

この報せが王に達した時、彼の部下たちは逃亡し、王自身もマニプールに避難しようと考えたが、彼の母は王に男らしく振舞うようにと諫めた。そこで、王は夜明を待って単身にて宮廷に向い、中庭にて彼が以前に殺害した王妃の一人の父である大臣に斬られた。

ボードー パヤー
Bodaw payā (1782~1819)

ボードーパヤーはアラウンパヤー王の第四男として生れ、若い時の名を^{マウン}Maung Waing°^{ワイン}と呼び、^{バドンミョー}Badonmyoを治めていた。

マウン・マウンが王として統治するには余りにも頼りにならなかったため、部下たちは^{バド}Badon^{ミン}Minに傾いていった。彼は先王アラウンパヤーの遺言を根拠に王位を主張し、1781年武装兵を引きいて宮廷に入り、マウン・マウンを斬った。マウン・マウンは僅か7日間統治したのみであった。新王は^{シンビューミヤー}Hsinbyumyā°-^{シン}shin, ^{ミン}Min ^{ダヤ}dayā°^ダgyī°, ^{ボードー}Bodaw ^{パヤー}paya°という三つの号をもっていたが、通例最後の号Bodawpayā°の名によって知られている。

ボードーパヤーは即位するや、マウン・マウンを王位に即けたすべての謀徒たちを処刑した。勿論、王自身も最初はその陰謀に加担した一人であった。

ボードーパヤーは自分に敵対する者を一掃し、かつてシンゲー王の妃であった4人の女王とその子供と共に焼き殺した。

王は部下たちに寛大な報償を与えた。しかし、数ヶ月後、彼の弟が自分に対して陰謀を企んでいることを発見し、しかもその徒党の中にはシンピューシン王の頃より最も秀れた部将の一人であったマハー・ティラトゥウも加わっていたことを知って、彼を叛逆者として処刑し、謀徒一味はことごとく根絶された。それ以後、王は如何なる骨肉の人といえども信用しなくなった。

それより1年後、シャン族でマハー・ダンマヤーザ・ディパティ（32号、36頁）の子であった。Myat HPon :という者が王位をねらって200人の武装兵をもって、ある夜宮廷を襲った。しかし夜明け頃には、すべてはせん滅された。その計画はサガイン地方のパウंगाにてなされたものであった。というのはパウंगाの人々の中にはボードーパヤーを憎む者がいたことは、王の兇刃に倒れた7日天下のマウン・マウンの旧領地がパウंगाであり、その地方は前例によって虐待されていたことから推察すれば当然であったかも知れない。その住民はことごとく幼児より僧侶に至るまで焼殺され、果樹は伐り倒され、作物は掘り返され、村は焼かれて、ジャングルと化した。王はその地にアウンミェロカ（エインドーヤ）パゴダを建て、虐殺を逃れた人々をパゴダ奴隷とした。パゴダ奴隷については学報12号110頁。

女や子供、僧侶までを虐殺したボードーパヤーの残虐性は如何なる理由があったにせよ、それは正当化されることはできない。それは王家の陰謀者に対する因習的処置としてのみ理解することができのみである。

1783年9月に下ビルマではモン族がビルマ族の圧迫より自由を得んとして反乱を起し、ラングーンを奇襲して、その総督を殺害したが、その反乱はかなり烈しい戦闘の後、鎮圧された。

同年、占星学上の理由のために、インワの南6マイルの地点にあるアマラプラに遷都が行われた。

アラカン征服

1731年にアラカンにおいて、サンダウィザヤ王（学報29号、322頁）が暗殺されて以来、無政府状態が続いていたが、アラカンの避難民はビルマ宮廷に調停を要請しに来ることがしばしばあった。遂には、一地方の長であるHariという者が、狂乱状態となったアラカンの国民はボードーパヤー王を彼らの支配者として歓迎するであろうと言ってきた。

すべてのビルマ王と同じく、ボードーパヤー王もアラカン征服せんと願望をいだいていた。折しもアラカン国よりハリのこの要請は野心家の王にとっては渡りに船とばかりにアラカン征服に乗り出すことを決意した。

1784～5年に王は彼の息子たちに3万の軍を指揮させて、山嶽を越え、あるいは、海岸沿いに送られた船隊と協力して、ラムリー島、チェドゥバ、タンドゥエイ等を先づ手中に納め、なおビルマ軍はアラカン軍を撃破し、首都ミヤウ・ウを占領した。アラカン王 Mahā Thamadayāza^{マハー タマダヤーザ} は彼の家族及び2万余りのアラカン人と共に捕虜となってビルマに連れ去られた。分捕品には、長身30フィート、口径11インチの大型砲と、1599年タイ国よりアラカンに持ち運ばれた30の銅製の像が含まれ、最も重要な宝はマハームニ像であって、それを奉納するためにマンガレーに特別に建てられたアラカン・パゴダに納められた。そしてアラカン人の捕虜の中より125家族がそのパゴダにパゴダ奴隷として献じられた。マハームニ像がビルマ人に奪われたことはアラカン人にとってはその国の独立を奪われた以上の損失を感じたという。このことは折にふれ既述したところである。

タイ遠征 (1785～6)

アラカンが陥落した同年、即ち、1785年にボードーパヤーはタイ再遠征のために大軍を編成したが、それは全く無益な、「ホールの言葉を借りれば、“Learnt nothing and forgotten nothing”」戦役であり、ビルマ国にただ枯渇と貧困をもたらしたに過ぎなかった。そして、思い上がった誇大妄想的征服者の野望に等しいものであった。従って、最初より彼の計画は失敗であった。

1785年に Junkceylon (Salang) 島を占領していたビルマ軍はタイ軍によって追い払われた。そこで、ボードーパヤーは6縦隊を編成してタイ国を攻撃せんと意図し、タヴォイとチェンマイに軍を送った。主力部隊は王自身が指揮してマルタバンに陣を布いた。その遠征には準備を整えるだけの十分な時も供給も与えられていなかった。王はカムブリに向って出発したが、食糧は不足し、国境近くにてタイ軍の攻撃に遭って敗北し、タヴォイにいたビルマ軍は粉碎された。そこで Three Pagodes ルートより王は、撃破された兵士をちりちりに置き去りにしたまま、ランゲーンに引き上げた。ボードーパヤーはダヴォイとテナッセリムを保持したが、チェンマイ及びそれ以南の地は永久にタイ国によって占められた。王はなおタイ国へ遠征軍を送り続け、彼の統治の終りまでそれを止めなかった。しかし、その結果はただ徒らにマルタバン以南の人口を減少したに過ぎず、ビルマ兵の略奪を逃れんとしてタイ国へ移住する者が多かった。そして、またタイ国側も人口移植のために多数の住民がタイ軍によって連れ去られた。

アラカンの動乱

1785年ビルマ軍によるアラカン征服以来アラカンは一総督の下にビルマ守備隊によって支えられた一地方と化し、動乱状態が続いていた。アラカンを併合したビルマは手に余る大仕事を引受けてしまった。ボードーパヤーは数千人のアラカン住民を強制的にその故郷を捨てさせ、メティ

ラ湖やミングン・ベルにて働かせ、またタイ遠征に送られる軍隊に奉仕させた。一方、アラカン国内に留まった住民たちもビルマ人の官吏によって虐待された。

その結果、暴動が次から次へ起り、ビルマの支配がますます抑圧的になるや、アラカンの地方の長たちが反乱を起し、幾千のアラカン人は国境を越えてチタゴンのジャングル地帯に避難したが、そこは英領内のベンガン地域に属していた。アラカン国内は砂漠同然の有様であった。約5万を数える避難民の中には反乱を計画したアラカン諸地方の長たちも含まれていて、彼らはビルマ軍への今後の攻撃に対する基地として英領内の管理が行き届いていない地方を用いた。彼らの降服を要求しにやってきたビルマ軍も英領内にキャンプを張ったが、撤退することを余儀なくされた。アラカン人たちもその後、ビルマ当局に渡された。ただ、アキヤブ地方のシンディンの頭チンビャンはどうしても捕えられなかった。彼はチタゴン丘陵にひそみ、そこよりビルマ国境守備地点を襲った。英軍はビルマの軍隊に国境を横ぎって彼を攻撃することを許したが、彼は1815年まで生きのび、遂に力盡きた。アラカン人たちはなお彼らの国を再び奪回せんとして紛争の連続を繰返し、結局それが第一次英緬戦争の主たる原因となるに到るのであった。

参 考 文 献

- Dr. Kyaw That : Pyi-daung-Su Myanmā Naing-ngan Thamaing (1962)
U Tin U : Myanmā Naing-ngandaw Thamaing : Sanpya (1957)
U Hpō : Kyā : Myanmā Yāzawin Akyin (1837)
U Min Han : Mayanmā Naing-ngandaw Hket-laik Yāzawin (1937)
Maung Ne Nywon : Kon : baung Hket Myanmāpyi (1833)
D.D.E. Hall : Burma (1950)
G.E. Harvey : Outline of Burmese History (1947)
ハーヴィ著・五十嵐智昭訳：ビルマ史 (1943)
著者不明：A Guide to the History of Burma
Sangermano : The Burmese Empire (1884)
Judson : Bur-Eug-Dict (1953)
J.A. Stewart & C.W. Dunn : Bur-Eug Dict Part 1-Part 4 (1940-1963)
U T'n Swe : Porāna Abhidhān (1954)
U Manung-gyi : Pāli Abhidhān Hkyut
W.S. Cornyn }
& } : Burmese Glossary (1958)
J.K. Musgrave }
U On : Shwe : That-pon Abhidhān (1954)
水野弘元著：パーリ語辞典
Tekkatho Myanmā Abhidhān Vol. I ~ V